

『余地』

～相談業務を楽しむ方法6～

<不連続と連続の融合>

杉江 太朗

～まずは漫画のお話～

私は、漫画が好きである。初めて読んだ漫画は父親が少年時代に集めていた、ドカベンである。それを読んで、野球を始めた。そこから始まり、天才バカボン、あぶさん、いっきゅうさん、釣りバカ日誌、がきデカなど父親の集めていた漫画を読み漁った。その延長で、クリスマスプレゼントに大甲子園（ドカベンの続編）を買ってもらったことも覚えている。

その後も、ドラえもん、クレヨンしんちゃんなどの少年漫画と続き、少し成長してからは、タッチ、美味しんぼ、金田一少年の事件簿、サラリーマン金太郎、ミナミの帝王、酒の細道などを買って読んだ。今でも、多くの漫画を並行して集めている。（ワンピース、グラゼニ、宇宙兄弟、健康で文化的な最低限度の生活、ちはやふる、進撃の巨人、信長のシェフ、ピースターズ、家族の練習問題など多数。覚えていない・・・）

ジャンルは問わない。とにかく気になった漫画を思いつきで買っている。なので、どの漫画を、何巻まで買ったのか覚えておらず、ダブって買ってしまうこと

も多々ある。気付いた時には、間が抜けてしまっているなんてこともあった。

漫画を買うことの意味は、当然、読んで楽しむことにある。趣味であるからそれで良いと思っている。

一方で、定期的に発売されるという側面も忘れてはいけないと思う。（一部、作者の都合により、不定期にしか掲載されないものもあるようだ）

定期的に発売されることで、次の発売を楽しみに待つことができる。巻末に「次巻は〇月に発売予定」なんて書いてあると、そのときは、「おっ次は、〇月に発売か・・・」なんて思うが、いざ〇月が来て、発売していることを知ると実際は、数ヶ月前のことは覚えておらず、その時点では、買って読むことを楽しみにしている自分がいて、そこには意味のあるようなないような、しかし、思い返すと、キチンと連続性のある生活を体験している気分になってくる。そんなことを繰り返していると気付けば1年が経っている。以上、長くなったがここまでが今回の前振りである。

～連続性のある生活を送れない日常～

相談現場は、目まぐるしく状況が変化していく。私の働く職場も同様である。虐待通告はいつ、どのタイミングで入るかはわからない。また相手は人であり、「今日は忙しいから平和に暮らしてね」というように、私たちではコントロールなんて出来るはずがない。家族の中で起きるトラブルも、当事者以外の人にとっては、不連続でしかない。

よってスケジュールの変更は日常茶飯事であり、日々優先順位を考えながら、対応に当たっている。

とは言うものの、長く付き合っている家族であれば、毎年この時期は荒れやすいとか、前に会ったときこんな関係であったから、そろそろ・・・なんて風に、想定しておくことが可能となる。また関係機関から、そろそろヤバいかも知れないという情報が入ると心の準備をしておくこともできる。この辺りは正直、当たるも八卦、当たらぬも八卦である。

ただし、そのように想定出来るようになると、スケジュールとしての変更があったとしても、気持ち置いていかれることはなく、ほんの少し、余裕を持って対応ができるかもしれない。

しかし全ての職員がそのように出来るのかと言われるとそうではない。関わる人たちの言動に振り回され、自分のスケジュールはグチャグチャになり、疲れていくという職員を多く見てきた。

人間、決まったことをこなすだけであれば、忍耐力は必要かも知れないが、平常心は保ちやすいのではないだろうか。しかし、明日の自分の生活がどうなるのかわからない不安定な状況下では、心は揺さぶられやすく、平常心を保つことは難しいだろう。

連続性があるかどうか、先の見通しを立てられるかどうか。この仕事を続けるためには、不連続の連続ではあるかも知れないが、その中に連続性を見出していく力が必要になると私は常々感じている。

～不連続の中に連続を確保する工夫～

そこで登場するのが、冒頭で書いた漫画なのである。定期購読という点が重要であるので、漫画でなくても構わない。要するに、仕事では連続性をキープしにくいいため、せめてそれ以外では連続性を確保しようということを大切にしている。

引退されたイチロー選手がルーティーンを大切にしているという話を聞いたことがある。例えば、朝力レー。さらにイチロー選手の妻がおにぎりを握り続けていたことや打席に立った際のあのポーズ。様々な場面でルーティーンを取り入れている。その連続性の賜物があの偉大なる成績である。イチロー選手を見て、大きな結果を残すにあたって、続けることが必須であることを学んだ。

では私の場合はどうか。まずは週刊誌。これは、少年誌も含み、月曜日はジャン

プ、ヤンマガ、水曜日はマガジン、サンデー、木曜日は漫画ゴラク、モーニング・・・。そこに隔週で発行されるビッグコミックオリジナル・・・。いわゆる、週単位で上記の雑誌を欠かさず読むようにしており、曜日ごとにイベント化されている。そして、冒頭に書いた漫画。単行本であれば、だいたい数か月に1度発行されるので、月単位でもイベントがやってくることになる。また月単位のイベントで言うと、ホンブロック通信（詳しくはネットで検索してください）が定期的に届くため、団士郎先生の漫画にも月1度定期的に触れる機会を確保できる。

年単位では、例えば、研修。『児童相談所とその近接領域における家族療法の実際』という研修会は毎年持ち回りでどこかで行われている。最近では参加出来ないが、かつては毎年参加していた。今でも、どこで開催されるのかや、誰が参加するのかなどは把握しており、毎年の恒例行事になっている。また年賀状や暑中見舞いも子どもたちに書いているが、子どもらの少しでも力になればという思いと、自分自身の中に連続性をキープするための能動的な行動でもある。

日、週、月、年単位で定期的なイベントを確保しておき、それを楽しむことで、その部分については少なくとも連続性をキープすることに繋がる。

そしてこの対人援助学マガジンの原稿を書くことも連続性があり、かつ能動的

な行動の1つである。常に同じ状況で書けるというわけではない。だけど、そこには締め切りがあり、書くという作業があり、そして編集長に送るという一連の流れがある。そしてその一連を楽しんでいる自分がいる。

私の場合は、漫画や雑誌や本というのが、連続性を実感するための利用しやすいツールであったが、人によっては、毎週ヨガに行ったり、毎年海外旅行に行ったりと、仕事を楽しんでいる方は、私生活でも何らかの連続性を持つ工夫をしているように感じている。

～連続性が見えにくい世界～

私は、毎日同じ生活が送れること、明日も今日と同じ生活が送れると実感できることが子どもの安定に繋がると考えている。児童福祉の分野で関わる子どもたちは、ある意味、不連続の中で生きていることが多い。いつどんなことで叩かれるのかわからない、転居が日常茶飯事になっている、日々の食事があるかもわからない、施設を転々とし養育者がコロコロと変わる・・・。そのような不連続の中に生きている子どもをたくさん見てきた。

それは、子どもだけではなく、その保護者も同様かも知れない。

子どもは社会生活を送るに当たって、主体的に力を発揮することが難しい。大人が不連続に流されていれば、当然子ども

もも流されることになる。そんな風に生活のベースが曖昧な状況で、安心して生活が出来るだろうか。

そしてそれは児童福祉の専従者にも影響をする。不連続の中で生きてきた子どもが一見不連続と見えてしまう対応を取ることにはある意味必然かもしれない。そうすると専従者もその不連続に触れることになり、巻き込まれてしまう。

そのような中でも連続性を確保するために様々な工夫や取り組みを見てきた。施設の行事はその一例である。「毎年、この時期にはこんなお祭りがある」という体験は一年単位での連続性を感じる良い機会になる。また毎月、誕生会をする施設もあった。もっと細部に目をやると、1日10分、職員との1対1の時間があるという施設もあった。たかが10分かも知れないが、その10分を続けることは、確実に連続性、明日も色々あるけれど、その時間だけは確実にキープされるという体験に繋がる。

そんなことを書いていると児童福祉の世界だけでなく、私たちの生きる日常は不連続の連続であると思えてきた。今日も明日もまったく同じ生活であることはあり得ない。『不連続の連続であることを受け入れ、その中に少しでも確実な連続を保つ体験』を続けることが難しいけれども大切にしていきたいことである。

余談ではあるが、これも私自身が連続性を感じるきっかけにはなっているのだ

が、日本には四季がある。名前には疎いが四季折々の花や木々を見ることや、旬の食べ物（春はホタルイカ、たけのこ、夏はすいか、秋は・・・など）をスーパーで見ることで季節を体感する。その連続が日常である。

季節が繰り返す一方で、雪が多かったり、少なかったりと毎年同じでないように、大枠では連続性を保ちながら、不連続があることを前提に、その中の連続性を楽しむだけの『余地』を常に持ちながら邁進していきたい。